

Weekly HABITA STANDARD

Contents

「200年住宅」と長期優良住宅

HABITAな風景

住まいは巣まい

キニナルマドリ

住まいのオーダーメード館403

住まい文化の栄

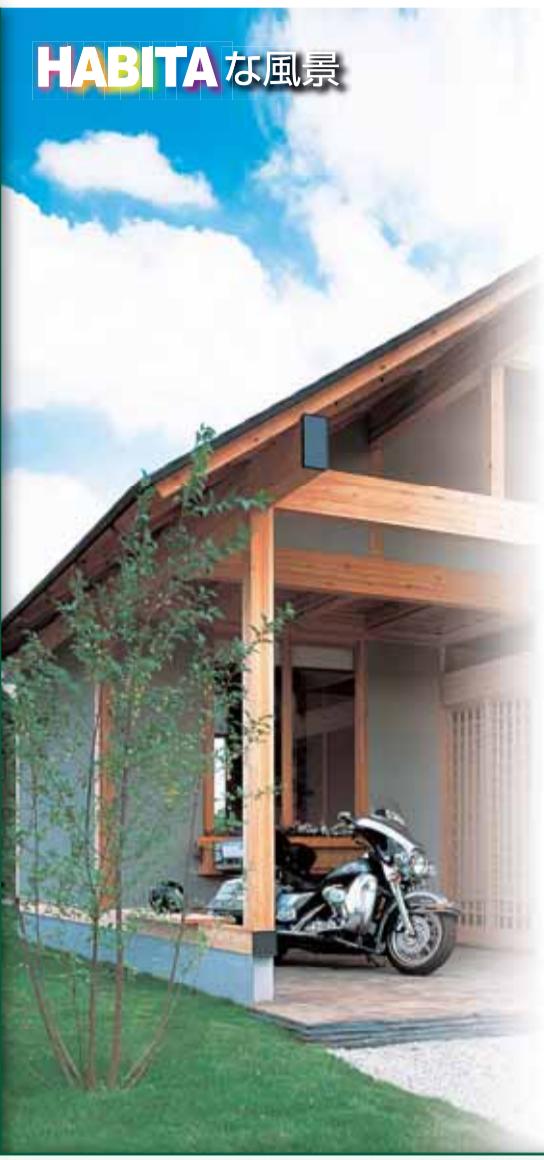
住健住康

Green Earth

Office HABITA

豆ハビ

連載



もてなしの心を育む出居

私の家には「^{ひり}出居」があります。祖父から聞いた話によると、日本の古い家にあるもてなしの心がカタチになった場所が出居だそうです。外に開かれた客間で、近所の人たちと、ちょっとおしゃべりしたり、テーブルを出してカフェ気分を味わってみたり、雨の日には子どもたちの遊び場、時には大切なものを包み込むための場所として…。最近は、父が大切にしているバイクが占領しています。いつまで置いておくのやら。祖父がそうしてくれたように、私も子どもや孫たちに語り継いでゆきたいと思います。

三澤 千代治の
住まいは巣まい

住まいは子どものために

「住まいは子どものためにある」は、私が住宅事業を始めたときからの今も変わらぬ考えです。

赤ちゃんは外に置いておけばすぐに死んでしまいます。住まいは赤ちゃんを守るためにあるのです。猛獣でも赤ちゃんが弱い動物は皆巣をもちます。例外に巣をもたない動物は馬と牛。しかし、彼らの赤ちゃんは生まれてすぐ歩きだします。お母さんのお腹の中が巣になっていたのでしょう。

古い書物に「巣まい」と記されているのを見ました。鳥が巣をつくるのは子育てのためです。卵を産み、ヒナを育てるために巣をつくり、風雨や外敵から守ります。人間の赤ちゃんも鳥と同じように生まれてから成長するまでに親に守られ、育てられます。



「人が住まいをつくるように、住まいも人をつくる」といわれます。住まいが人間形成のうえで大きな意味をもち、環境の善し悪しが子育てを左右することは確かです。

住まいは大人の目線でつくられがちですが、巣づくりの原点は子どもの立場にたった家づくりだと思います。子どもが健やかに育つために安全で、子どもの感性や能力を伸ばすための家こそが、本来の住まいの役割だと思うのです。

(MISAWA・international 社長)

Weekly HABITA STA

「200年住宅」と長期優良住宅

「200年住宅」をスローガンに始めた超長期住宅 2009年6月「長期優良住宅普及促進法」として施行されました。その大きな手本は、国産材の使用と住宅の性能基準を設けるものでした。同じ頃、洞爺湖サミットによる地球環境への関心も高まり、性能の中でも省エネルギー性能がクローズアップされました。しかし、なぜか「200年住宅」と言う表現は消えてゆきました。つまりいつの間にか、意義や目的がすっかり転化してきたのです。真の「200年住宅」の意義と目的に迫りたいと思います。

省エネで環境は守れるか

最初に長期優良住宅の中で着目された、省エネルギー性能について考えてみましょう。

北緯が高いヨーロッパや北米とは違い、実は日本の国はとても温暖な地です。一般家庭における冷暖房を使うエネルギー消費量は、全体の4分の1に過ぎません。最もエネルギーを消費しているのは給湯の40%、続いて照明器具や家電の35%です。冷暖房にたくさんエネルギーを使っているイメージがありますが、実態は違います。日本の多くの地では、省エネルギー住宅を建築するよりも、給湯や電化製品の省エネ

ルギー化を進める方が効果があります。

また、省エネの大きな要素も、実は住宅の性能よりも設備機器にあります。そして、この性能を高めることは技術の進化で担われることでしょう。200年という期間の尺度でこれらの技術を考えれば、確実に進

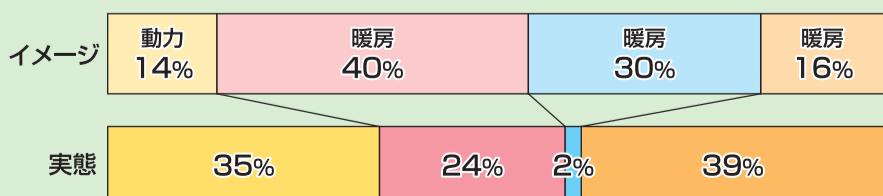
化していることは間違ひありません。

一方、断熱性や気密性を高める工事にかかる費用は安くありません。たとえ微々たる効果でも環境に貢献するのであれば、進めないわけにもいきません。しかし気密性を高めたために24時間換気をつけてファンを回し続けるのは、何のための省エネルギーか分からなくなってしまいます。ファンはエネルギー効率が非常に悪いのです。

ましてや省エネルギー住宅を造ることが、超長期住宅として長持ちする家づくりの条件にはなりません。長期住宅から優良住宅へと、いつの間にか問題がすり替わってしまったようです。

では、真の「200年住宅」の意義はどこにあるのでしょうか。それは資産価値を維持し、損をしない住まいづくりへの礎となるはずです。

家庭におけるエネルギー消費の実態とイメージの乖離



出典:平成20年版環境・循環型社会白書

「200年住宅」のすすめ

樹木は貴重な地球の資源

なぜ「200年住宅」を推進しなければならないのでしょうか。その大きな理由は同じように地球環境問題にあります。温暖化の元凶と言われるCO₂の増加を防がなければなりません。そのためには省エネルギー住宅以上に「200年住宅」として取り組まなければならないことがあるのです。

基本となることは単純です。樹木は空気中のCO₂を取り込み、炭酸同化作用によって幹を太らせていますが、この生長には長い歳月を必要としています。住宅の構造材として使えるまでになるには、少なくとも40年はかかります。5寸の材を取るためにには、60年以上の生長を待たなければなりません。日本の住宅の平均寿命と言われる30年ほどで解体して廃棄しては、いつか地球の貴重な資源である樹木を根絶しかねません。腐らせて燃やしても、結果的には木材は大気中のCO₂に還ってしまいます。少なくとも木材が生長してきた年数まで使わなくてはなりません。

200年使わなければならぬ理由

こうして年月をかけて生長してきた樹木に対して、製材されて建築現場に届く木材は30~35%しかありません。枝葉は落とされ、丸い幹は削られて角材になります。ただし、これらの端材も単純に捨てられているわけではなく、燃やされてエネルギーとして使われています。

いずれにしても、削られた70%近い部分は、短い期間で大気中に戻されてしまいます。厳密に考えれば、残された30%の部分で、生長してきた年数を取り返さなければなりません。これを計算すると次のような計算式になります。

$$60 \text{ 年} \div 30\% (0.3) = 200 \text{ 年}$$

つまり、60年材を利用するのであれば、200年は使い続ける必要があるのです。地球の貴重な資源である樹木の活用方法から「200年住宅」の意義が生まれて来ています。200年もつかどうかは誰もわからないことです。しかし200年は使わなければなりません。きちんと手入れをすればできるのです。その為に何をしてゆくのかが大切なのです。

日本の住宅の歴史を振り返ってみると、ほぼ400年周期で大きな変化を迎えていました。豊穴住宅から高床に変わり、寝殿造り、書院造り、数寄屋造りへと変わっていました。その変化の

要因には疫病や社会構造や戦争と平和などがありました。その周期の境である2000年に起きている最大のテーマが環境問題です。「200年住宅」を意識し、推進する時が来ました。

「200年住宅」の条件

しかし200年先の世界を正しく予見できる人はいません。どのように「200年住宅」の条件を定めてゆけば良いのでしょうか。

1面でも触れたように、200年の尺度に立てば建築技術の進化は必然です。同様に法規も変わり、生活様式も変わります。家族という社会制度にも変化があつても不思議ではありません。これらの変化を吸収できる住宅でなければなりません。

そのヒントを与えてくれるのは、実際に200年以上前に建てられた住宅です。現代まで住み継がれ、古民家再生されて、現代の住まい方に順応した住宅に生まれ変わっています。平成の時代に建てられた住宅も、100年を超えた未来に、古民家として再生される家を目指すことが、まさに「200年住宅」を実現することになります。

幸いにも200年を超えて残されている建物は、日本ばかりでなく世界に多く残されています。その多くは木造住宅です。これらの残された建物に共通する項目が、「200年住宅」の条件のヒントになりました。その項目は次の5つです。



- ①地産の木材であること。
- ②大断面の材であること。
- ③乾燥した材であること。
- ④木材を現して用いること。
- ⑤間面のつくりとすること。

地産の木材であること

地産の材が使われていたのは当然のことでもあります。200年以上も前は流通も未発達で、遙か離れたところから木材を運ぶことは考えられませんでした。

一方、日本では近年、木材の自給率が20%を切る事態まで到り、遠い海外から木材が運ばれているのが普通

になりました。そして、白蟻や腐朽菌の害は外材に多く発生することが指摘されはじめています。生育している地には、その地の環境にふさわしい対処を取りながら植物も生きています。超長期の住宅構造体には、あらためて国産材の活用を推進するのが適切です。

大断面の材であること

古民家を訪れるとき一番に驚くのは小屋組みに見える梁の大きさと、それを支える柱の大きさです。建物の強度として、大きな断面の木材を使えば強くなることは誰でもが直感で分かることです。長持ちさせるためにも、細い材より太い材の方が強いこともあります。これからの変化を吸収するために、細い材より太い材の方が強いこともあります。経済設計と称して、時には構造計算することが、より細い材を選択する手立てとなっていました。強度以上に、200年使うためにこそ材を太くしておくべきなのです。

乾燥した材であること

本見 世界最古の木造建築物である法隆寺は、1400年の間、建設当時よりもむしろ強くなってきたと言われています。木材は乾燥することで強度が増し、初めて安定した材となります。そもそも木材への害の多くは白蟻や腐朽菌によるものであり、これらは適度な湿気があるところに発生します。乾燥させることは強度だけではなく、長持ちさせるためにも大切なことです。

しかし現代の気密性の高い住宅では、暮らしながら乾燥させる古来からの建て方は通じません。あらかじめ、乾燥した材を使わなければならぬのです。集成材は、この乾燥においてコストパフォーマンスの高い材として世界では普及してきました。



木材を現して用いること

いつの間にか、現代の家はビニールで覆われた家となってしまいました。外装を考えても同様です。すべて隠してしまうことで、さらに構造材の品質を下げ構造材に予算をかけないことが普通になりました。住宅が短命になった理由の一つがここにあります。本来であれば最も資産価値が保たれる部位であるはずなのですが。

古民家で木材を密封して使われることはほとんどありません。木材を老けさせてしまう可能性があるからです。さらに剥き出しにされていることで、材の傷み具合も目で見て確認ができます。的確なメンテナンスを続けるためにも、構造材を現しにすることは大切なことです。

間面のつくりとすること

実績の積み重ねによって培われてきた建築物は、とても合理的な造りになっています。大きな柱は規則正しく碁盤の目状に並べられ、その柱をつなぐように大梁が掛けられています。大切なのは、こうして得られた空間です。板を張り、畳を敷き、障子を入れて空間を使いこなしてきました。階段さえも家具のようにつくり、時には場所を変えることができます。この単純なつくりがあったからこそ、間面記法で家の大きさを測ることができました。

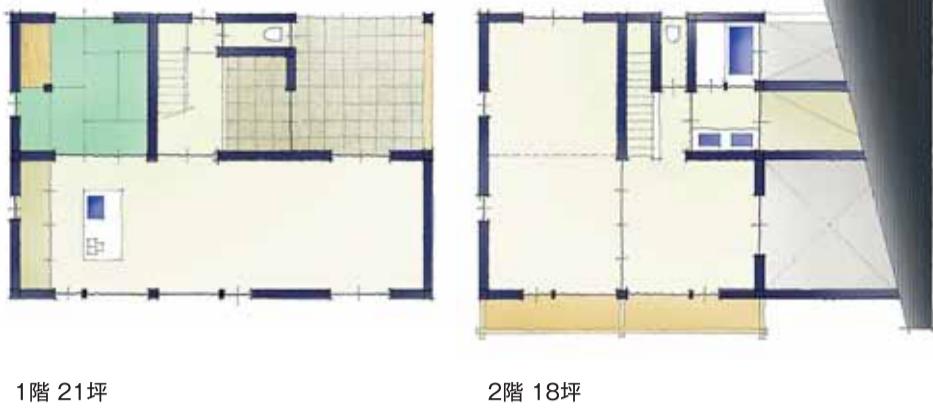
100年後に古民家再生をすることを考えれば、こうした自由度が確保された空間にしておかなければなりません。いたずらなデザインが、家の寿命を縮めているのです。

200年を越えて残してきた家に共通するのはたったこれだけのことです。逆を考えてみれば、遠くから外材を運び、構造計算上のギリギリの細い材にし、乾燥は表面的に、構造体をサイディングやビニールクロスで隠し、将来の変化を受け入れない家です。

残念なことに現代に建てられている家の多くが、昔とは逆の建て方です。一番大切な構造体をないがしろにして、隠すことにコストをかけています。結果的に短命になってしまうのも分かるような気がします。

加えて大切なのは、様式としてのデザインです。1棟のデザインの是非ではなく、時代を超えた様式が求められます。長い時を経ても、愛され続ける住宅のデザインを追求することは「200年住宅」として木材を使い切るためにの大切な要素のひとつになります。

キ
ナルマ
ドリ



1階 21坪

2階 18坪

吹き下ろしの屋根

屋根の形が複雑になると良いことはありません。棟はひとつにして、一部2階の家をデザインする時には、吹き下ろしの大屋根のつくりにすると、単純であってなおかつ莊嚴な家になります。

吹き下ろしの程よい空間を利用してリビングの上に吹き抜けができます。

また、玄関先が立派に見

えると、家全体の格が上がります。

吹き下ろしの大屋根は、この玄関先の出居空間からも木組みが見えて、単純な家への陰影と印象を深めます。



住まいの
オーダーメード館

住まいづくりに、どうしてもこだわりたいところはありませんか。たとえば、以前見つけたドアのデザインを再現したいとか、

自分流のこだわった家具を造りたいとか。こうしたモノづくりを進めている企業が各地にあります。

「住まいのオーダーメード館403」には、モノづくりに自信のあるさまざまな企業が集まっています。オーダーメイドを考えたとき、「どこに頼んでいいかわからない」という壁を乗り越え、直接つくり手と相談できる場と

なります。

せっかくの住まいづくりにちょっとだけ贅沢なアイテムを使ってみませんか。

住まいのオーダーメード館 403

東京都新宿区新宿1-2-1

<http://order403.com/>

オーダー403

検索



住まい文化の森

大工は人類初めての職業

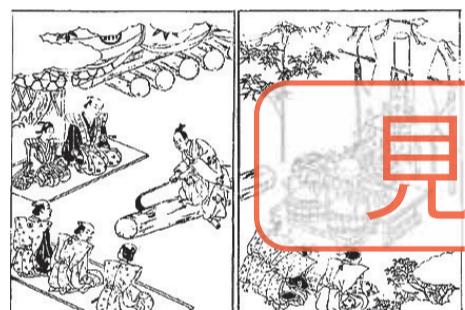
日本には長い歴史を持った企業が多く残っています。それは世界を見てても極めて稀なことです。その中で最も古いとされるのが、京都の建設会社である「金剛組」です。四天王寺を建設する時から1400年の間メンテナンスをしながら建設業を営んできました。

2番目は1000年以上前からある山梨の旅館です。旅館は詰まるところ、床と食事のサービスです。

話は飛びますが、イタリアとオーストリアの国境付近で5000年前の男「アイスマン」が見つかりました。彼の所持品である皮のコートやブーツから、この時代に既にプロとして仕立てていた人がいたことが分かりました。

生活の基本は、衣・食・住にあり、それを職業にしてみれば、仕立屋と料理人と大工です。これらの職業が最も古く生まれた職業であったと考えることも自然なことだと思います。

ところで日本語の「大工」という呼び名は、「金剛組」が司る仕事を知るとわかります。四天王寺の伝統的な年中行事として、年初に「鉋始めの式」が行われています。鉋とは鉋ができる前の大工道具で、昔は木材を平らに仕上げる道具として使われていました。



出典:匠家必要記

行事の儀式は原木から製材し仕込むまでの工程を模したもので。その式次第は、「杖打ち大事」から始まり、「墨掛け大事」→「糸引き大事」→「鉋打ち大事」→「土器出し」→「御酒返し大事」となります。ここに大工の名のヒントがあります。

石を扱う人を石工と呼び、機械工や印刷工の名が現代にあるように、上記にある「大事」を取り行う人のことを、大工と呼んだのではないでしょうか。長い歴史が残る日本語の中に、建築の仕事が「大事」と呼ばれていたことも大切なことです。人類が生まれてからできた専門職の中でも、「大事」を扱う大工は筆頭であったのではないかと思えてきます。

そして大工が手掛けた建物を、大切にすることも住まい手の大変な礼節なのかもしれません。

住 健 住 康

じゅうけんじゅうこう

健康な家は、美しい姿勢から

健康な家とはどんな家でしょうか。健康に暮らせるような住環境であることと、家自体が健康であること、両方が揃って、初めて健康な住まいとなるでしょう。

例えば、人は病気にかかると不思議と姿勢が崩れるものです。しっかりと骨格で正しい姿勢が保たれていることは、健康である証です。そして、美しさも感じます。これと同じことが住宅にも言えます。住宅にもしっかりと骨格があり、その姿勢が良ければ、地震にも耐えられる健康体となります。

外装や内装でどんなに着飾っても、正しい骨格を持ち、姿勢を正さなければ、住宅も本当の美しさや長生きを得ることはできないのです。

構造計算がなく、経験則で造られた昔の家は単純でした。家の骨格である柱や梁は少しでも太い方がよいと考えます。また、柱は規則的に等間隔で立てて、しっかりと梁でつなぎます。こうした単純で基本的な造り方をしているので、昔の家は柱と柱の間を数えればおおよその家の形状がわかりました。こうした数え方を間面

きほう 記法と言います。

築100年以上も経った古民家が現代の住宅として生まれ変わるもの、間面のつくりがあり、柱や梁を活かしながら間取りを組み直すことができるからこそ可能であると言えます。

また、古民家の魅力のひとつは、立派な柱や梁をそのままインテリアに活用できることです。似たような寸法で、規則正しく並んでいるからこそ、美しさがあります。まさに骨格からの美しさであり、姿勢の美しさでもあります。この美しさがあるからこそ、長く残してゆきたい家と感じます。間取りを決めて、あとから構造計算を沿わせた建物とは違う、真の美しさです。

美しい骨組みは、健康に長生きする家の秘訣で、基本です。木で家を建てるとき、このことを忘れずにいたいものです。



住まいづくりに役立つ情報が満載!

Weekly HABITA
毎月2回発行

・見積りの見方 ・予算計画の立て方 ・健康のこと ・間取りのことなど

お申し込み・お問い合わせ : MISAWA international またはお近くの HABITA へ



地球にやさしい住まいづくりを。

EarthFamily

地球の家族の一員として
樹木を大切に使う、家づくりを始めませんか。

詳しくはホームページへ <http://www.habita200.jp>

会員募集中!
うれしい特典満載!!





住まいは、第二の森林になる



地球温暖化の対策として、CO₂を吸収し、固定化する森林の役割が見直されています。現在、日本国土の68%が森林で、しかも、その40%が植林された人工林です。ところが、日本は使用する木材の70%以上を輸入しています。日本に木材がないのならまだしも、戦後拡大造林した樹齢40年から60年

の良質な木材が採れる森林が、今、日本には豊富にあります。

要で、樹から木材として活用できる割合を考え合わせると、

戦後、日本に木材が不足していた時に、海外の木材を大量に安価で輸入した時代の名残が、国産材が充分に育った今も、木材を輸入に頼るままにしているのです。

一方、地球環境の課題から見ると、CO₂を吸収し、固定化する東南アジアの森林が毎年、大規模に伐採されています。また、北欧から化石燃料を燃やしCO₂を排出して、わざわざ大量の木材を運搬しています。このようにして、本来、地球温暖化を防ぐ役割の貴重な森林の木材を使って建てた日本の住宅は、たった26年で建て替えられています。

HABITAは、国産材の5寸角の柱と1尺の梁を標準として使っています。15cmの太さの木材を採るために樹は、樹齢が60年以上は必

樹齢60年の樹から採る木材は、200年活用しないと、地球資源の枯渇を招きます。この考え方を、資源同調といいます。地球環境への負荷を軽くし、持続性と循環型の社会を目指すことが求められる今、住宅も大きく変わることが求められています。

HABITAが「200年住宅」を推進し提唱しているものその答えの一つかのです。

樹は生長の過程でCO₂を吸収し、ある程度大きくなるとCO₂の吸収量は少なくなります。そのためには、生長した樹を伐採し、新たに植林することも、地球温暖化の対策として、とても重要なことです。

さらにCO₂を吸収し固定化した木材をたっぷりと使った住まいが街に多く建ち、長く残してゆくことは、ことは、街にCO₂を固定化した第二の森林をつくり守っているのと同じことなのです。

山の森は守り育て、街の森は守り残してゆくのが、住宅の環境対策の第1のテーマなのです。

言わば「200年住宅」は、人類としてのテーマです。



Office HABITA

赤を基調に設置されたエッグチェアが迫力の打ち合わせスペース。MISAWA・internationalのサロンでは、まずこのエッグチェアをお迎えする。デンマークの建築家アルネ・ヤコブセンがデザインし、50年以上経った今も愛され続けるデザインの椅子で有名だ。これだけの色と数を揃えた空間に圧倒される。

美しいデザインは、愛され続け、世代を超えて受け継がれてゆく。MISAWA・internationalが提唱する新住宅ブランドHABITAも、古民家のように愛され続ける住宅であってほしい、そのコンセプトに

豆ハビ

葉っぱが口で、葉っぱが胃

木が育つのにどこから栄養をとっているか
知っている?
根っこが吸い上げているかと思ったら違う
んだ。木が大きくなるのはたくさんの炭素
が必要で、根っこからは、水しかとれない。
空気中にある二酸化炭素から炭素を取り出し

て、集めて幹や枝に蓄えてゆくんだよ。その仕事を
しているのは、枝の先にある緑の葉っぱなんだ。だから
木にとっては、葉っぱが口であり、胃や腸とお
んなじ。あんなに大きくなる木が空気で
育っているなんて不思議だね。

される
住宅は長
く残っていく
ものです。」

住宅業界に長年携

わり、70歳を超えた今でも、良い
家づくりとい
うものを常に
追求し続けて
いる三澤氏。

世界160地
域、日本全国
334件の古民
家を調べたと
いう。世代を超
えて残される
古民家から学
んだことを、
HABITAの基
本のコンセプ
トとして、200



年住宅の必要性を提唱している。
そして、HABITAに共感し提携した企業は、全国に今なお増え続けている。国産材をたっぷりと構造体に使ったHABITAの家は、まるで森に還るように各地に建ち、広がっている。古き良きものを新しく。本当に良いものは時代を超えて残るものである。家も、椅子も、大切にしようと思う気持ちちは同じである。

実際にどんな家が建つのか知りたい

実際に家が出来るまでの工程を見たい

実際にHABITAに住むお客様の声を聞きたい

住まいづくりの見たい・知りたい・聞きたいは

HABITA/TV

<http://www.m-int.jp/habitatv>

www.habita200.jp/

